

薰衣香などさまざまの法あり、さるに足利の頃は女は薰物を用ひぬれど、男は沈をたくべしといへり、今は匂ひ袋を用ゆ、簡便にしたがふ成べし、是室まちの末にはみえたり、

〔香道軌範上〕四季焼次第

春二月	臘梅	花雪	丹霞	三芳野	道遙	夏	花橘	中川	八菖蒲	橋	端午	加月	秋	七夕	夕	斜月	加月	八重菊
冬	千鳥	臘梅	紅塵	古木	沈外	加												

七節次第

神祇	二月	斜月	紅塵	龍田	道遙	法花	太子	古木	釋教	東大寺	斜月	花雪	蘭子	磐若	太子						
戀龍	月田	七夕	葉	富士	名殘	小糸	面影	菊	小案	云	中川	八橋	蘭子	似	堅	菊	心ウ	タ	ガ	ヒ	心ウ
無常	中川	千鳥	八橋	臘梅	丹霞	柴	影	似	花	雪	ハ	追	香	ナ	蘭子	度	燒	ク	木	也	般若
述懷	橘	臘梅	名殘	袖	蘭子	古木	賀	斜月	葉	道遙	蒲	法	午	菊	月	祝言	道遙	葉	加月	斜月	根

以上七節畢

首途	太子	斜月	白鷺	法花	加	般若	出陣	太子	追	斜月	橋	法花	陣中	太子	道遙	菖蒲	道遙	斜月	加月	蘭子
也	歸陣	三芳野	法	加	必	菊	花見	似	三芳野	名	殘	袖	面影	道遙	月見	面	龍	田		

以上六節畢

右七節六節、義政公依命宗信撰之、

薰物合

〔五月雨日記〕香合といふこと、いにしへよりつたへて、代々のきみもすてたまはず、家々にもこれをこのみ侍る、延喜天曆のかしこき御ときよりぞ、そのまなぐさだまれる事侍ると、後普光園殿、藤原はかきおかせたまへりける、それぞ今のおきてなるべし、歌合、根合、菊合、そのほかさうしあはせ、繪合なども、例はおほかるべし、香合のうちにも、薰物合になほ世あがりけると、きより